

ネットで楽しく英語コミュニケーション

松本青也 編著
ジェニファー・マギー、
ダン・モルデン、野口朋香 著

A5判 178pp.
本体2,000円＋税

大池寿子



これからの英語学習を変えるための一冊

おせっかいな本である。海外の人たちとコミュニケーションをすることは楽しい。しかも、ネットの時代である。留学をする費用や、手紙でやりとりをする手間などを気にせず、自宅や学校で、楽しみながら英語を身に付けられるありがたい環境が今そこにある。それを自分たちだけが享受するのではなく、英語に興味関心がある日本中の人たちに、知ってもらい、楽しんでもらい、世界を広げてもらいたい。そんな熱い心で、この本は書かれている。

「何のために英語を勉強するのか」は長く議論され、「どうやって英語を身に付けるか」も常に研究されてきた永遠のテーマである。しかし、あまり役に立たない難しい議論は横に置いて、筆者たちが目指すところは「楽しく」、「簡単に」である。

「強いて勉めるから勉強である」と、昔から聞かされてきた。しかし、我慢や辛抱が美德であった時代は終わった。「自ら学び」なんてことは、よほど楽しいことであると教えてあげなくてはならない。ましてや「自ら考える」ということは、楽しくて、楽しくて仕方がない仕組みを伝授してあげる必要がある。

この本は英語学習に対する考え方の転換をすすめ、基本的な英語の特徴を説明し、ネット上のサイトやノウハウを教え、最後には実際の場面ですぐに使える基本的表現を集めて、その練習CDまでついている。手とり、足とり、おまけにググッと背中を押すような、おせっかいな筆者たちの熱意と愛情を感じる。この本を読んだら、ネットで楽しく英語コミュニケーションをしないわけにはいかない。

PISAの結果が出るたびに、日本人の学力低下が話

題となる。TOEFLの国別平均点も日本は低迷している。発展途上であれば、苦勞をしてでも勉強し、国家や家族のために貢献したい、豊かになりたいという意欲が強いのは当然である。しかし現在の日本では、高学歴であっても就職は難しく、せっかく入社しても終身雇用の保障はない。数学、理科に限らず、英語でも、勉強の面白さや楽しさを、また実社会との関連性を、いかに生徒たちに伝えるかが、教える側の勝負すべきところである。

平成21年3月に高等学校の新学習指導要領が告示された。「授業は英語で行うことを基本とする」の一文が注目をあつめ、平成25年が近づくのを不安に感じている教師もいる。しかし、授業の主体は生徒である。さまざまな場面設定で言語活動をし、生徒の4技能をバランス良く伸ばすような授業展開をしなさいとある。教師ではなく、生徒に英語をもっともって使わせる仕組みを工夫すべきなのである。

英語はラテン語のように死んだ言語ではない。コミュニケーションのツールである。音楽の授業で楽典や音楽史だけを学んで、歌を歌わない、楽器も演奏しないことはありえない。パソコンやネットを使わずに、情報モラルやシステムを理解しただけで、情報を習得したとは言えない。英語の授業はどうだろう。英文法を学び、単語帳を作り、構文や頻出表現を覚え、英文を解析し、日本語に置き換える。古典の授業と手法は同じである。現代語でないから「古典」なのだ。英語は生きている言葉である。学問や教養としてではなく、不透明な将来のためでもなく、今すぐ世界中の人たちとコミュニケーションするために、英語を学習したいのだ。そこを誤魔化していける時代ではない。

コミュニケーションが新しい学習指導要領の柱である。生徒一人ひとりが、自分の言葉で、自分の興味関心を広げていく教育活動に、ネットをどう活用できるかが喫緊の課題である。コミュニケーションは画一的な授業では展開できない。ネットなら生徒一人ひとりにALTがつくようなものだ。ネットを使って「教科書から飛び出す」、「教室の壁を抜ける」、そして「教師を超える生徒を育てる」。そんな姿勢を英語教師に求めたい。是非、この本からアイディアを得て欲しい。

(おおいけ としこ・愛知県立木曽川高等学校長)